

日蓮大聖人御書全集

おおたどののにようぼうごへんじ

大田殿女房御返事

そくしんじようぶつしよう

(即身成仏抄)

新版
1380
〜
1384

おおたどののにようぼう(へんじ) そくしんじようぶつしよう

大田殿女房御返事(即身成仏抄)

こうあん ねん がつ にち

弘安3年('80) 7月2日

59歳 さい 大田乗明の妻 おおたじようみよう つま

はちがつぶん こめいつこく た そうら お

八月分の八木一石、給び候い了わんぬ。

そくしんじようぶつ もう ほうもん しよだいじようきよう だいにちきようとう

即身成仏と申す法門は、諸大乘経ならびに大日経等

きようもん ふんみよう そうろう か きようぎよう ひとびと

の経文に分明に候ぞ。しかればとて、彼の経々の人々

そくしんじようぶつ もう ふた ぞうじようまん お かなら むけん

の即身成仏と申すは、二つの増上慢に堕ちて、必ず無間

じごく い そうろう き く い ふた

地獄へ入り候なり。記の九に云わく「しかして二つの

じようまん じんせん な によ い すなわ だいむざん ひと

上慢、深淺無きにあらず。如と謂うは、乃ち大無慙の人と

な とうらんぬん

成る」等云々。

しよだいじようきよう ぼんのうそくぼだい しようじそくねはん そくしんじようぶつ ほうもん
諸大乘経の煩惱即菩提・生死即涅槃の即身成仏の法門

は、いみじくおそたかきようなれども、これはあえて

そくしんじようぶつ ほうもん こころ にじよう もう もの

即身成仏の法門にはあらず、その心は、「二乗と申す者は、

ろくおん けんじ だん じんじゃ むみよう だん もの

鹿苑にして見思を断じて、いまだ塵沙・無明をば断ぜざる者

われ ぼんのう つ むよ い

が、『我はすでに煩惱を尽くしたり』と、無余に入つて

けしんめつち もの けしん そくしん めつち

灰身滅智の者となれり。灰身なれば即身にあらず、滅智な

じようぶつ ぎ ぼんぷ ぼんのう ごう くか

れば成仏の義なし。されば、凡夫は煩惱・業もあり苦果の

えしん うしな ぼんのう ごう たね ほうしん おうじん

依身も失うことなれば、煩惱・業を種として報身・応身

くか しようじそくねはん ほっしんによらい

ともなりなん。苦果あれば、生死即涅槃とて法身如来とも

なりなん」と、二乗をこそ弾呵せさせ給いしか。さればと

て、煩惱・業・苦が三身の種とはなり候わず。

今、法華經にして、有余・無余の二乗が無き煩惱・業・苦

をとり出だして即身成仏と説き給う時、二乗の即身成仏

するのみならず、凡夫も即身成仏するなり。この法門をだ

にもくわしく案じほどかせ給わば、華嚴・真言等の人々の

即身成仏と申し候は、依經に文は候えども、その義は

あえてなきことなり。僻事の起こり、これなり。

弘法・慈覚・智証等は、この法門に迷惑せる人なりとみ

そろうろう

候。いかにいわんや、その已下の古徳・先徳等は言うにた

てんだい

だいしじゅうろく

ざす

とうよう

ちゅうじん

もう

らず。ただし、天台の第四十六の座主・東陽の忠尋と申す

ひと

ほうもん

危

そろうろう

そうら

人こそ、この法門はすこしあやぶまれて候ことは候え。

てんだい

ざす

じかく

まつ

受

ひと

しかれども、天台の座主・慈覚の末をうくる人なれば、

偽

愚

果

うえ

にほんこく

しょう

いつわりおろかにてさてはてぬるか。その上、日本国に生

う

ひと

にほんこ

思

い

い

を受くる人は、いかでか心にはおもうとも言に出だし

そろうろう

しゃか

たほう

じつぼう

しよぶつ

じゆ

りゆうじゆ

候べき。しかれども、釈迦・多宝・十方の諸仏・地涌・竜樹

ぼさつ

てんだい

みようらく

でんぎようだいし

そくしんじようぶつ

ほけきよう

かぎ

菩薩・天台・妙楽・伝教大師は、即身成仏は法華経に限

思

そろうろう

わ

でしとう

思

るとおぼしめされて候ぞ。我が弟子等は、このことをおも

いで たま
い出にせさせ給え。

みようほうれんげきよう ごじ なか しよろんじ しよにんし しやく

妙法蓮華經の五字の中に、諸論師・諸人師の釈まちま

そうら みな しよきよう けん い

ちに候えども、皆、諸經の見を出でず。ただし、竜樹菩薩

だいろん もう ろん たと だいやくし よ どく くすり

の大論と申す論に「譬えば、大薬師の能く毒をもつて薬と

もう しやく いちじ こころ 得 たま

なすがごとし」と申す釈こそ、この一字を心えさせ給い

み そうら どく もう く じゆう にたい しやうじ

たりけるかと見えて候え。毒と申すは、苦・集の二諦、生死

いんが どく なか どく そうら どく しやうじ そく ねはん

の因果、毒の中の毒にて候ぞかし。この毒を生死即涅槃・

煩悩即菩提となし候を、妙の極とは申しけるなり。良薬

ぼんのう そく ぼだい そうら みよう ごく もう ろうやく

もう ぞく へん ぐすり ろうやく もう そうら

と申すは、毒の変じて薬となりけるを良薬とは申し候い

りゆうじゆぼさつ だいろん もう ふみ いっぴやく まき

けり。この竜樹菩薩は、大論と申す文の一百の巻に

げこん はんいやとう みよう ほけきよう みよう そうら

「華嚴・般若等は妙にあらず、法華經こそ妙にて候え」

もう しゃく だいろん りゆうじゆぼさつ ろん らじゆうさんぞう もう

と申す釈なり。この大論は、竜樹菩薩の論、羅什三蔵と申

ひと かんど そうろう てんださいし ほうもん ご

す人の漢土へわたして候なり。天台大師は、この法門を御

覧 なんぼく 責 たま そうろう

らんあつて、南北をばせめさせ給いて候ぞ。

かんど とう なかごろ にほん こうにんいご ひとびと あやま

しかるを、漢土の唐の中、日本の弘仁已後、人々の誤

しゆつたい そうら とう だいく だいそうこうてい ぎよう

りの出来し候いけることは、唐の第九・代宗皇帝の御宇、

ふくうさんぞう もう ひと てんじく わた そうろうろん ぼだいしんろん

不空三蔵と申す人の天竺より渡して候論あり。菩提心論

もう

ろん

りゆうじゆ

ろん

そうろう

ろん

い

と申す。この論は竜樹の論となづけて候。この論に云わ

ただしんごん

ほう

なか

そくしんじようぶつ

ゆえ

さんまじ

く「唯真言の法の中にのみ即身成仏す。故に、これ三摩地

ほう

と

しよきよう

なか

か

か

もう

もん

の法を説く。諸教の中において闕いて書かず」と申す文あ

しゃく

化

こうぼう

じかく

ちしやうとう

ほうもん

り。この釈にばかされて、弘法・慈覚・智証等の法門はさ

そうろう

だいろん

りゆうじゆ

ろん

んざんのことにては候なり。ただし、大論は竜樹の論た

じた

争

ぼだいしんろん

りゆうじゆ

ろん

ることは、自他あらそうことなし。菩提心論は、竜樹の論、

ふくう

ろん

もう

あ

そうち

不空の論と申すあらそい有り。これはいかにも候え、さて

そうち

おき候いぬ。

ふしん

だいろん

こころ

そくしんじようぶつ

ただし、不審なることは、大論の心ならば即身成仏は

ほけきよう かぎ

もん もう

どうり 極

ぼだいしんろん

法華經に限るべし。文と申し、道理きわまれり。菩提心論が

りゆうじゆ ろん

もう

だいろん

背

しんごん

そくしんじようぶつ

竜樹の論とは申すとも、大論にそむいて真言の即身成仏

た うえ

ただ

いちじ つよ

み

そうろう

を立つる上、「唯」の一字は強しと見えて候。いずれの

きようもん

よ

ただ

いちじ

お

ほけきよう

は そうち

經文に依つて「唯」の一字をば置いて法華經をば破し候い

しようもんたず

りゆうじゆぼさつ

じゆうじゆうびばしやるん

い

けるぞ。証文尋ぬべし。竜樹菩薩の十住毘婆沙論に云わ

きよう

よ

ほうもん

こくろん

うんぬん

じごそうい

く「經に依らざる法門をば黒論」と云々。自語相違あるべ

だいろん

いっぴやく

い

ほつけとう

あらかん

からず。大論の一百に云わく「しかも法華等の阿羅漢の

じゆけつさぶつ

ないしたと

だいやくし

よ

どく

くすり

受決作仏は乃至譬えば、大薬師の能く毒をもつて薬となす

とううんぬん

しゃく

そくしんじようぶつ

どうり

書

がごとし」等云々。この釈こそ、即身成仏の道理はかか

そろう

れて候え。

ぼだいしんろん

だいろん

おな

りゆうじゆだいしよう

ろん

ただし、「菩提心論と大論とは同じ竜樹大聖の論にて

そろう

すいか

こと

みそろう

候か。水火の異なりをばいかんがせん」と見候に、こ

りゆうじゆ

いせつ

やくしや

しよい

らじゆう

した焼

れは竜樹の異説にはあらず、訳者の所為なり。羅什は舌や

ふくう

した焼

もうご

じつご

けんねん

けず、不空は舌やけぬ。妄語はやけ、実語はやけぬこと顯然

がつし

かんど

きようろん

渡

ひと

いつびやくしちじゆうろくにん

なり。月支より漢土へ経論わたす人、一百七十六人なり。

なか

らじゆういちにん

きようしゆしやくそん

きようもん

わたくし

その中に、羅什一人ばかりこそ教主釈尊の経文に私の

ことばい

ひと

そろう

いつびやくしちじゆうごにん

うち

らじゆう

言入れぬ人にては候え。一百七十五人の中、羅什より

せんご

いつびやくろくじゆうしにん

らじゆう

ち

し

そろう

先後の一百六十四人は羅什の智をもつて知り候べし。

らじゆうきた

たま

ぜんご

いっぴやくろくじゆうしにん

あやま

あらわ

羅什来らせ給いて、前後のぜんご一百六十四人が誤りもあらわ顕れ、

しんやく

じゆういちにん

あやま

あらわ

こ賢

そうろう

新訳の十一人が誤りもあらわ顕れ、また小ざかしくなりて候

らじゆう

ゆえ

わたくし

ぎ

かんつうでん

い

も羅什の故なり。これ私わたくしの義にはぎあらず。感通伝かんつうでんに云わ

のち

た

さき

つ

うんぬん

さき

つ

もう

く「後に絶え、前に光く」と云々。「前に光く」と申すは、

ごかん

こうしん

やくしや

のち

た

もう

らじゆういご

後漢より後秦までの訳者。「後に絶ゆ」と申すは、羅什已後、

ぜんむい

こんごうち

ふくうとう

らじゆう

ち

受

少

小賢

善無畏・金剛智・不空等も、羅什の智をうけてすこし少こざか

そうろう

かんつうでん

い

いげ

しよにん

みなしゆん

しく候なり。感通伝かんつうでんに云わく「已下の諸人ならびに皆俊

うんぬん

なり」云々。

ぼだいしんろん

ただ

もんじ

りゆうじゆ

されば、この菩提心論ぼだいしんろんの「唯」の文字は、たとい竜樹りゆうじゆの

ろん ふくろう わたくし ことば

つぎしも

論なりとも、不空の私の言なり。いかにいわんや、次下

しよきよう なか

か か

書

そうろう

ぞんがい

に「諸教の中において闕いて書かず」とかかれて候、存外

そくしんじようぶつ

てほん

ほけきよう

のあやまりなり。即身成仏の手本たる法華経をばさしおい

跡 形

しんごん

そくしんじようぶつ

た

ただ

て、あとかたもなき真言に即身成仏を立て、あまつさえ「唯

いちじ

置

じよう

てんかだいいち

びやつけん

の一字をおかるる条、天下第一の僻見なり。これひとえ

しゆらこんじよう

ほうもん

に修羅根性の法門なり。

てんだいちしやだいし

もんぐ

く

じゆりようほん

こころ

しゃく

い

天台智者大師の文句の九に、寿量品の心を釈して云わ

ほとけ

さんぜ

ひと

さんじんあ

しよきよう

なか

く「仏、三世において等しく三身有り。諸教の中におい

ひ

つた

書

そうろう

てこれを秘して伝えず」とかかれて候。これこそ

そくしんじようぶつ みようもん そうら ふくうさんぞう しやく け

即身成仏の明文にては候え。不空三蔵、この釈を消せ

こと りゆうじゆ よ ただしんごん ほう なか

んがために、事を竜樹に依せて、「唯真言の法の中にのみ

そくしんじようぶつ ゆえ さんまじ ほう と しよきよう なか

即身成仏す。故に、これ三摩地の法を説く。諸教の中に

か か 書 そうろう

おいて闕いて書かず」とかかれて候なり。されば、この論

つぎしも そくしんじようぶつ そうろう そくしんじようぶつ

の次下に即身成仏をかかれて候が、あえて即身成仏に

しろうじんとくにん に そうろう ひと そくしんじようぶつ

はあらず。生身得忍に似て候。この人は、即身成仏は

ほうもん 聞 そうら そくしんじようぶつ ぎ

めずらしき法門とはきかれて候えども、即身成仏の義は

窺 ひとびと そうら にじようじようぶつ

あえてうかがわぬ人々なり。いかにも候えば、二乗成仏・

くおんじつじよう と たも きよう てんだいだいし

久遠実成を説き給う経にあるべきことなり。天台大師の

「諸教の中においてこれを秘して伝えず」の釈は、梅檀、

梅檀。恐々謹言。

外典三千余卷は、政道の相違せるに依つて代は濁ると明

かす。内典五千・七千余卷は、仏法の僻見に依つて代濁る

べしとあかさされて候。今の代は、外典にも相違し内典に

も違背せるかのゆえに、二つの大科一國に起こつて、すで

に亡國とならんとし候か。不便、不便。

七月二日

日蓮 花押

大田殿女房御返事